古

二年

画数 5

筆順 一 十 古

オン コ

クン ふる＝い＝す

成り立ち

古

〝十〟と〝口〟とを組み合わせてつくった字です。「十人もの人の口から出てくる〝はなし〟」といういみの字で、「いいふるされたこと」「〝ふるい〟こと」をあらわしたものです。

〝ふるい〟〝むかし〟などのいみにつかわれます。

〔〝十〟と〝口〟との会意字と解くのは、許慎（西紀五〇―一二一年）の説文解字以来の定説であったが、近代の金石学で、〝頭蓋骨〟の形を象ったものと解く説がある。しかし、児童向きではない。〕

使い方

▽わたしの古くなったふくを、いもうとにやりました。いもうとは「おねえちゃんのお古じゃ、いや」といいました。それで、「わたしだって、おにいちゃんのお古のえんぴつを、つかっているのよ」といってやりました。お古をつかうのは、はずかしいことではありません。

▽つかい古したタオルはぞうきんになります。

熟語例

▽古今（むかしと今。また、むかしも今も。「古今の名著をよむ」などといいます。「とおいむかしから今までの、すぐれた本をよむ」といういみです。）

▽古都（古い都。むかし、都があったところ。「古都・京都のたびをたのしんだ」などといいます。）

▽古典（むかし、つくられた、りっぱなもの。とくに本のことをいいますが、音楽などの芸術についてもつかいます。）

▽古風（むかし風なこと。はやりの風でないこと。）

午

二年

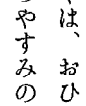
画数 4

筆順 ノ 𠂉 𠂉 午

オン ゴ

クン

成り立ち



午

うすのりょうがわに立って、二人で力をあわせてつくための〝杵（きね）〟をあらわした字です。

〝十二支〟といって、むかしは、〝年〟でも〝日日〟でも〝じこく〟でも〝ほうがく〟でも、すべて十二のどうぶつであらわしました。その七ばんめが〝うま〟で、中国の七ばんめの字が〝午〟だったため、〝うま〟とよまれるようになりました。

じこくでは〝ひるの十二じ〟です。だから、その前を〝午前〟といい、後を〝午後〟というのです。

〝午〟がこのようにつかわれるようになりましたので〝きね〟をあらわす字は、〝木〟をつけて〝杵〟という字になりました。

使い方

▽十二じにならすかねを「正午のじほう」といいます。ひるの十二じを、むかしは「午のこく」とよびました。「正午」というのは、ちょうど午のこく、ということです。

▽ぼくは、おひるごはんをたべると、ねむくなります。なつやすみのあいだじゅう、午後になると、ひるねをしたから、そのしゅうかんで、ねむくなるのです。イタリアでは、午後二じかんくらい、ひるねをするしゅうかんがあるそうです。イタリア人は、うらやましいな。

▽おじいちゃんは、きょうはごようがあって、午睡がとれませんでした。

熟語例

▽午睡（ひるねのこと。すこし、あらたまったいいかたです。）

▽子午線（「子」はきた、「午」はみなみをあらわします。子午線は「経線」ともいいます。ちきゅうを、ほっきょくとなんきょくをとおって、たてにくぎった線のことをいいます。）